
風鈴人形

†アラクネ†

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風鈴人形

【Zコード】

N4966C

【作者名】

十アラクネ+

【あらすじ】

強い陽射しに照らされた真夏の新居。新婚の圭一は、妻と共に懐かしい思い出の品を見付ける。それは、幼くして死んだ、天使のような妹の宝物。

(前書き)

これは、夏ホラー2007の企画で投稿した作品です。ぜひ、他の先生方の作品も「夏ホラー2007」で検索してみて下さい。

清々しい檜の香りに包まれた、真新しい我が家。

ゆつたりと漂って来るのは、挽き立ての珈琲豆の香ばしい香り。俺は真新しいカーテンを大きく開き、出窓を全開にして外の空気を取り込む。

強い夏の陽射し。

蝉の声。

素晴らしい開放感に深呼吸し、幸せに満ちた笑みを浮かべる。

この幸福は永遠に続く不变のものだと、一升の墨よりも無く信じられた。

「ケイちゃん、これは要る物~?」

段ボール箱の山に囲まれ、新妻の香奈子が呼んでいる。

俺は妻用の珈琲カップを片手に、引越しの荷物に埋もれたリビングに入った。

「ほら、これえ」

カップを受け取り、首筋にくすぐったそうに俺のキスを受けながら、香奈子が掲げて見せたのは古臭い小さな箱。

「うちのお袋が勝手に詰めたやつだろ?」

妻の肩をやんわりと抱きながら、俺はその箱を改めて見直す。

「……てんしさま?」

それはフェルトペンで書かれた、稚拙な平仮名。

記憶が揺らめき、すぐに焦点を結んだ。

「……ああ。これ、結衣のだ」

香奈子が、少しだけ目を上向けて俺を見る。

「コイちゃん……、妹さんの？」

少し遠慮がちなのは、結衣が既に他界しているからだらう。

俺は香奈子の後ろから手を伸ばし、ヒヨイと箱の蓋を持ち上げた。途端に、香奈子があつと声を上げて目を輝かせる。

「綺麗……！」

箱の中に丁寧に寝かされていたもの。

天使様と名付けられたそれは、浴衣を着た小さな少女の人形だった。

「夜祭りで買つたんだよ」

夜祭り？と聞き返しながら、香奈子はそろそろと人形に手を伸ばしている。

「そう、結衣がすげー気に入っちゃってさ。買つてやつたら喜んだのなんの」

懐かしい故郷に久々に戻つたせいだろう。

俺の記憶は鮮やかに過去のフィルムを巻き戻し、幼少期の自分と妹の姿を再現して見せた。

結衣。

色白で小さくて、リスみたいに真ん丸な目が可愛いかった、二つ下の妹。

記憶の中の結衣は、いつも大切そうにこの人形を抱えていた。

当時の俺はやたらに体が弱く、ショッチャウ吐いた倒れたと騒ぎを起こしては親を心配させていた。

それでいて恩知らずなことに、元気な時はとんでもない悪戯者。母親の化粧箱に蛙を仕込んだり、トイレの扉を開かなくしたり、

仲間と万引きのような真似までした。

そんな悪ガキだった俺だが、不思議にあまり怒られた記憶は無い。叱責を受けるのは、いつも妹の方だった。

「何て言つのかな。要領が悪いって言つか、タイミングが悪いって言つか

俺の仕掛けた悪戯を覗こうとして見つかり犯人にされてしまった、なんてのは日常茶飯事。

30分帰りが遅れただけで来客と鉢合わせ出来ず、妹だけ小遣いを貰えなかつたり、高価な菓子を食べそこねたり。

本当に些細なことばかりだが、いつもいい思いをするのは俺。貧乏クジは常に妹ばかりが引いていたように思つ。

「いつもお兄ちゃんばかりズルいつて、よく泣いてたよな

それでも氣弱で引っ込み思案な妹は、俺の後をチョコチョコと着いて回つていた。

そんな妹を、俺も幼いながらに可憐く思つていたりもした。

「俺が七才で、結衣が五つの時だつたかな」

近くの神社で行われる、盛大な夏祭りの夜。

忙しい両親に代わつて、俺は妹を連れて宵の宴に混じつっていた。

……と言つても、もちろん二人ではしゃいでいただけなのだが。

赤々と輝く提灯の列。

普段とはまるで違う、活気に溢れた境内。

親から貰つた僅かばかりの小遣いを使いながら、俺と妹は嬉々として祭の賑わいの中を走り回つていた。

……見ておいで、まあ見ておいで。

その奇妙にザラついた声が聞こえてきたのは、社の裏手に回った頃だつたろうか。

(あれ何?)

先に興味を示したのは、妹の方だった。

それはみすぼらしい露店で、いい場所が取れなかつたのだろう、提灯の明かりから少しだけ離れた、薄暗い一角にひつそりと佇んでいた。

近寄つてみると、掠れた文字で『みつがんき』とある。

(ねえ、これ何?)

無邪気に走り寄つた妹は、古臭いガラスケースを覗くなり、愛らしい嬌声を上げた。

(可愛い!!)

ケースの中には、ズラリと浴衣姿の人形が並べられていた。

それも、当時の子供達が誰でも持つてゐるような有り触れた物ではなく。

もつとずつと、恐ろしいほどに瑞々しい、艶めいた存在感を持つた……。

(これはねえ、お嬢ちゃん)

錆ついたパイプ椅子を軋ませ、その軋みより更にざらついた声で、店主がねつとりと説明した。

(みつがんき、秘密を願う姫、と書いて密願姫と言つものだよ)

頭上にぶら下げる裸電球の一つがチカチカと明滅し、店主の老いた顔に奇妙な陰を作る。

(誰にも内緒にしている秘密をこいつにこいつそり教えてやるんだ。そうすると、不思議なことに少しずつ命が宿つてくる)

食い入るように店主の話を聞いている妹を横目に、俺はそつと值札を見た。

ゲッ、千円。予算オーバーもいいところだ。

(けれども、詰まらない秘密や、秘密の数があんまりに少なによつ
じや、人形は目を覚まさない)

俺は店主に見えないように、妹のスカートの裾を引っ張った。

(たくさん頑張って秘密を与えてやつた暁には、目を覚ました人形
が、お嬢ちゃんの願いをきつと叶えてくれるだらうよ)

全く、子供騙しの商売にこの高値とは。

(ほり、もういいだろ結衣。行くぞ)

腕を引いて歩き出そうとすると、妹は哀願するような顔で俺を見
上げた。

(こんなの買わないよ。ほり、千円もするんだ)

値札を額で指して言つ。妹は嫌々と頭を振るだけで、その場から
動こうとしない。

(駄目だつて言つてるだろ!)

怒鳴りつけると、妹はビクッと体を震わせて涙を浮かべた。

唇を噛み締め、泣き出しそうな必死で我慢しながら、それで
も足を踏ん張つて嫌々を続ける。

氣の弱い妹が俺に逆らつなど有り得ないことだつたが、その夜ば
かりは、結衣は最後まで折れることはなかつた。

「結局は俺も根負けしちゃつてさ。一円分の小遣い全部はたいて、
買ってやつちやつたわけ」

熱い珈琲を啜りながら、俺は遠い想い出に目を細めた。

今にして思えば、あの時、無理をしてでも買ってやつて本当に良
かつたと思う。

結衣は、その五年後に事故で死んだ。

登校途中、居眠り運転のトラックに突っ込まれ、ほぼ即死だった
といつ。

いつも一緒に並んで登校していた俺は、その日を限つて、卒業
式の準備の為に一足早く家を出ていた。

そう、貧乏クジは、結局最後まで妹が引き続けてしまったのだ。

「ケイちゃんが昔病弱だったなんて、意外だわ」

香奈子が人形を掲げたまま振り返った。

「ん~? 病弱って言うか……、すぐにケロッと回復はしちゃうんだけど。やたらに怪我も多かったしなあ。親は心配しつ放しだつたと思うよ」

香奈子がフフ、と笑う。

「私も子供が生まれたら、そういう苦労をさせられるのかしら?」

「どうかな」

俺は珈琲カップを床に置き、香奈子の背中を抱いて髪に鼻を寄せた。

「早く子供が欲しいな」

妹の愛らしい姿がチラつくせいなのかもしれない、俺は昔から、早く我が子を得ることを望んでいた。

香奈子が半分だけ振り返り、囁くように答える。

「……うん、私もよ」

その瞬間。

ひどく涼やかで透明な音が、静かなりリビングに響き渡った。

チリィ、ン

「え?」

音があまりに近くから聞こえた為、俺と香奈子は揃って顔を上げた。

チリン
チリイン

「これ、……風鈴?」

そう、これは風鈴の音だ。どこか懐かしい、昔ながらの風鈴の音。

でも、どこから？

「……」

香奈子が黙つて視線を動かし、俺も誘われるよ^{うに}その後を追つ。

チリン
チリン
チリイン

真昼の明るい陽差しに照らされ、香奈子の手の中で、美しい少女人形が目を閉じていた。

濡れたような艶を持つ黒髪を優雅に垂らし、薄いピンク色の唇を少しだけ開くようにして、滑らかな肌を陽に煌めかせ。
少女の着る艶やかな浴衣は、確かに纖細な刺繡によつて描かれた、風鈴の柄だ。
けれど。

まさか、と口を開きかけた俺は、言葉を喉の奥に詰まらせた。

チリン

震えている。

少女の漆黒の長い睫毛が。

ピンク色の唇が。

香奈子の手が震えているのか？

チリイン

……いや、違う。

震えてこぬのではない。そりぢやなくて、これは。

チリイイ……ン

俺と香奈子は、声も無くただそれを見詰めた。

美しい少女人形がふるふると睫毛を揺らし、陽の光を反射させて夢のように輝くのを。

幼い唇をしつとりと濡らせてゆつくつ開き、真珠のような前歯をチラリと覗かせるその綺麗らしい仕草を。

……を、……ました。

やがて少女の唇から流れ出すか細い囁き。

風鈴の奏でる響きと人形のあまりに妖艶なオーラに飲まれ、俺も香奈子もぼんやりと耳を傾けるしか出来ない。

……曰、……は、テス……だったので裏のか……てまし……

(何だ?何を言つてゐ?)

少女の言葉が少しずつ鮮明になるにつれ、辺りの雑音がテレビのボリュームを擰るようにして引いていく。

つるわいほどだった蝉の声も。窓の向こうから聞こえていた子供達の嬌声も。下の道を走る車のエンジン音も。

ラスで飼つた金魚を、ぶつかって水槽」と落としちゃいました。床を苦しそうにビキビキ跳ねて、誰もいなかつたから怖くなつて逃げました。

(「Jの瓶……?」)

パパの大事なお酒を割りました。怒られるのが嫌だつたから、ミー口のせいにしました。

(……結衣?)

それは確かに、記憶の中に残る結衣の声そのものだつた。間違えるはずなどない。懐かしく愛しい妹の声に、頭よりも先に感情が反応していた。

(じゃあ、これは)

ママの口紅を勝手に使いました。力を入れたら折れちゃつて、仕方ないから裏庭にこいつそり埋めて隠しました。

クラスのカズ君と喧嘩しました。

牛乳を、飲んだフリだけして流しに捨てました。

いつまでも続く、他愛のない秘密の告白。これはかつて、妹が人形に話し続けた隠し事の告白なのだろうか。願いを込め、祈りを込めて訴え続けた、秘密の暴露なのだろうか?

結衣。

幼くして天に召された、俺の可愛い……

今日、ミー口のパン飯に、おじいちゃんが畑で使つお薬を混ぜる実験をしました。

(え?)

ほとんど匂いを嗅いだだけで食べなかつたけど、白い入れ物のお薬を入れたやつだけ、気付かないで食べました。

(……何だつて?)

今日は、お兄ちゃんの飲む口アリ、しないだミーハー飯に入れた白い入れ物のお薬を混ぜました。すごく苦しそうに吐いて、ママが急いで来ました。でも、ミーコみたいに死ななくてガツカリしました。

(何を……)

突然のことについて、頭の回転がついて行かない。いきなり何を言い出したのか。やはしこれは非現実か?まやかしの单なる夢か?
固まつたまま動けない香奈子の震えだけが、俺に現実を意識させる。

今日は、おじいちゃんのケツアツのお薬と、お兄ちゃんの風邪のお薬を入れ替えておきました。夕方に、お兄ちゃんは急に真っ白な顔になつて倒れました。ママとパパは、ヒンケツつて言つて慌ててました。

今日の夜、おじいちゃんがすごく真つ赤な顔になつて救急車が来ました。でもすぐ死んじやつたみたいです。おじいちゃんはいつもお兄ちゃんばかりヒイキするから、嫌いだから別に悲しくありませんでした。

今日は、お兄ちゃんの部屋のブランドに氷をまいておきました。映画で見たみたいに派手に転んでて面白かったけど、机にぶつかつただけで、下に落つこちなくて残念でした。でも、おでこから一杯血が出てて、いい気味と思いました。

今日は……

延々と、いつまでも続く狂った告白。

あどけない口調からは考えられないような悪意の濃密さで、俺は吐き気を覚えた。

「こんな、結衣の言葉なわけ……」

悪質な白昼夢を打ち破ろうと頭を振った時、ふいに香奈子がビクリと肩を震わせた。

「香奈子！？」

思わず彼女の肩を抱き止めた俺は、金縛りの状態で動けないそのままの中で、美しい人形がゆっくりと瞼を持ち上げるのを見た。

本当は、お兄ちゃんなんて嫌い。大嫌い。いつもチヤホヤされて好き勝手なことして、怒られるのはいつも結衣。ズルい。お兄ちゃんはズルい。ズルいズルいズルいズルいズルいズルいズル……

長く艶めいた上下の睫毛を少しづつ放し、その奥から現れた瞳の何と美しく、邪悪なことだらう。

微かに開いていただけだった唇が微笑みの形に歪み、青白かった頬に薔薇色の光が輝き。

ああ。お願い、てんしさま。

切なくなるような願い請う響きに胸を締められた時、突然辺りの風景がグニャリと歪んだ。

（香奈子！）

思わず叫ぶが、声にならない。

風景は瞬く間に溶けて混じり合ひ、色の渦となつてうねり、俺を飲み込む。

（香奈子……）

全ての感覚を失う間際、俺は妹の切なる祈りの声を、微かに聞いたような気がした。

お願ひてんします。

お兄ちゃんが一生で一番、すこしずく幸せだと思った時に、私の運命と、お兄ちゃんの運命を、

丸ごと、そっくり取り替えて下さい

清々しい檜の香りに包まれた、真新しい我が家。

ゆつたりと漂つて来るのは、挽き立ての珈琲豆の香ばしい香り。結衣は真新しいカーテンを大きく開き、出窓を全開にして外の空気を取り込む。

強い夏の陽射し。

蝉の声。

素晴らしい開放感に深呼吸し、幸せに満ちた新妻の笑みを浮かべる。

さあ、今日はこれからが大忙しだ。

引越しの荷物を片付けて、近所に挨拶周りをして、その他にもやることはたくさんある。

結衣は鼻歌混じりに軽やかにスカートを翻して、軽やかにキッチンを立ち去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4966c/>

風鈴人形

2010年10月12日00時43分発行